



No. 76

昭和53年4月6日発行

〒814

福岡市西区西新6丁目

西南学院大学図書館

図書室から図書館へ — 新入生のために —

図書館長 八 木 幹

この2月に行われた大学入試3日目、大学図書館の一部、学習室・開架閲覧室が、臨時に受験場として使用された。当日、問題用紙を前にした受験生の真剣な眼差しを、半日、監督責任者の立場で観察する機会を得た。学習室の明るい、開放的な雰囲気も、この時は、すっかり異様な緊張のうちに、長い半日の刻みを示していた。特に、1時限目の開始直前の空気は、何時もながら、殆ど息苦しい程である。もっとも、開始ベルとともに、受験生が問題解答にとりかかるのを見ると、かえって気分が落ち着いてくるから妙なものだ。広々とした学習室ならぬ試験場を見渡しながら、この4月に、やがて新入生として、入館してくる表情を予想する。競争率と合格者数の割合を素早く暗算すると、ふと気持ちに微妙な屈折が生じてくる。

この中から、新入生として図書館にはじめて足を運ぶ若者の胸にどのような期待がこめられていることであろうか。入館した新入生は、これまで見慣れた高校時代の図書室とは異質のものを、この大学図書館に見出してくることであろうか。

理想的な大学教育の場は、当然教師と学生の有機的、相互的つながりを前提とするものであり、そこでは、学生は単に限られた一つの空間、大学施設の、単なる一時的通過者であってはならない筈である。成程、大学の理念は、時に現実の容赦ない妥協に押し流され、日々の後退を示すことも事実である。しかし、4年間の学生生活の位置づけが、辛うじて、精々外的にその存在を主張するだけの外観としての建物、施設の素通りを暗示するような結果になれば、事は問題である。

古い伝統を誇る大学では、大学附属中央図書館が、事実上、学部、学科の専門図書館と、その目的、機能面で別々に存在している例が少なくない。この中において、本学の図書館は、学習図書館・研究図書館という多目的役割を統合的に果そうと懸命にとりこんでいる。新入生諸君が、高校時代の図書室と本質的に異なる雰囲気を、今後大学図書館で経験するであろうと吾々はひそかに自負する。

しかし、研究、教育という言葉は、時に余りにも安易に使われている事も否定できぬ。確かに、吾々は図書、雑誌資料の集中管理、保管の面で、

せいっぱいの努力をつくしてきた。同時に、研究、学習の二兎を追う本学の図書館は、前途にきびしい困難があることを十分に覚悟しなければならない。学部学生の要望を主たる対象として運営される学習図書館の在り方と、教授、研究者の専攻分野における資料の整備、徹底した集中的情報提供の実現といった方向では、予算経費面においても、時に困難な選択をせまってくるものであり、本学の図書館が、名実ともに、中央図書館として、研究、学習上、それぞれの目的、機能を達成し、適切な運営を遂行していくためには、容易ならぬ決意と、それに相応した十分な予算上の出費、負担を必要とする。

一方において、専攻分野における研究者の期待、要望にこたえて、資料収集、管理、更には、情報検索の面で、一層の質的向上をはかり、他方、学部学生の学習上の目的を十分に配慮して、利用効果の充実を心がけるということは、言うまでもなく、至難な両面作戦である。それにも拘らず、吾々は、敢て、この課題に挑戦し、期待された図書館の目的達成に全力を傾け、その業務に懸命に従事してきた。昨夏、2階に複写機を設置し、自動操作による方式で、学生諸君の便宜に供してきたことも、又旧年10月中旬以降、休業日を除いては、原則として、土曜日を含めて、朝9時から夜9時まで、開架閲覧室を学生諸君の利用のために開放しているのも、困難を克服しながら、開かれた大学図書館の姿勢を示す一つの具体的なあらわれである。

今後の4年間の学生生活にとって、図書館が、単にその前を素通りするだけの大学の一施設にならないように、新入生諸君に希望したい。冬を生きのびた希望が、勢よく陽光を反射させる4月の空は、同時に、忍び寄る雨雲に、たちまち、晴れやかな微笑にかげりを見せる定かならぬ栄光をひそめている。

新入生諸君が期待する学生生活の展望が、雨雲にたちまち視界をさえぎられる4月のはかない、一瞬の栄光に終ることなく、新たな内面世界への出会い、参加へと導くものとなることを、吾々は心から期待する。

新入生のための読書案内

— 各教授に聞く —

神学部

神学部教授 関谷 定夫

キリスト教とはわが国では一般に西欧の宗教と考えられ勝ちであるが、実は東洋の宗教なのである。聖書の大部分はパレスチナで書かれ、大成されたといつてよい。先年英国の或る有名な大学図書館を見学した時、外国の学術雑誌が並んでいる中に、ヘブル語の雑誌が日本語の雑誌のすぐ隣に並べられているのを見て奇異に感じた。しかし考えてみればふしぎではなく当然のことなのである。両者とも分類上同じ東洋語なのである。

聖書特に旧約の方は純粋に東洋の古典であり、ヨーロッパ人よりも我々日本人により親しみ深いものなのである。それで聖書を本当に理解するためには、まずこのことを認識し、東洋の感覚で読み、味わうよう心得なければならぬ。今回はキリスト教の背景としての旧約聖書に関連した手頃の手引書を紹介しよう。まず旧約は古代オリエントの歴史と諸文化を背景としているのでそれらの諸宗教と諸文化について知る必要がある。まずアブラハムと関係の深いシュメールの宗教と文化、特にウル文化については、N. クレマー「歴史はスメールに始まる」(新潮社)やウル発掘者として名高いウーリーの「ウル」(みすず書房)がすぐれた手引書である。族長時代以来イスラエルと交渉の深かったヒッタイトの文化については、ツェーラム「狭い谷・黒い山」(みすず書房)が最も詳細で面白い。旧約は世界史の一環として、特に比較文化史的立場からアプローチすることも有益である。そうした面からは、文芸春秋社の「大世界史」シリーズの第1巻三笠宮崇仁「ここに歴史は始まる」が最も手頃な参考書である。殿下は長く日本オリエント学会の会長をつとめられ、旧約の研究ですぐれた業績を有しておられる。本書はたんなる歴史ではなく、旧約を中心とした古代オリエント史の概説書である。ジャーナリストであるが学問的に信頼できるものとしてツェーラム「神・墓・学者」(中央公論社)がある。

次に考古学的面からは、新潮社の「沈黙の世界史」シリーズの第1巻江上波夫「聖書伝説と粘土板文明」がすぐれている。また文学ないし神話学の面から聖書本文にアプローチしたものと、ガスター「世界最古の物語」(みすず書房)と矢島文夫訳「ギルガメシュ叙事詩」(山本書店)の一読をすすめてたい。

文学部(英)

文学部助教授 片岡 章

世の中には不思議なことが沢山あって、よく何々の七不思議と言われます。学生諸君の答案用紙にも実に不可解な文章が頻出し、しばしば不愉快な謎解きを強いられます。今頃は、この調子でゆくと、私にもあのナスカ平原の巨大な線模様の謎解きに挑戦する資格さえ出来るかもしれないと思っています。英語・英文学を専攻する者には、せめて卒業の頃にはこの謎解きの苦役から私達を解放して頂きたいものと願っています。四年間をそのために過すのですから、自分の選んだものにはそれ相当の成果を上げてもらいたいというわけですが、それには

先ず英語で書かれたものを少しでも多く読んで欲しいものです。確かに、英語を理解するためには、その他色々な領域の知識が必要であり、またそうした勉強を通して培われた理解力が不可欠です。しかし、だからといって英語・英文学そのものの勉強をいつまでも延ばすわけにはゆかないでしょう。やはりテキストのほかに自分で本を選択し、英語を読み進めてゆくことが大切でしょう。

主体性ということがよく問題になります。例えば信仰においては、神の主体性を自分の主体性とするという面があると思いますが、それにはどこかで先ず自分の主体性を放棄するという難関があるはず。今難関と言いましたが、これは私にとってだけでなく、多くの人にも通過しづらい関所であろうと思われるからです。信仰の問題は今はおくとして、もし私達の主体性がこれ程に頑固なものであるならば、その頑固さを英語の勉強に逆用したらどうでしょう。テキストは自分の好みとは無関係に選ばれ、その勉強にはどこか強制されているという意識がつきまとうかもしれません。しかし自分の責任で本を選び、自分の意志によって計画を立て、その遂行を自分で課してゆくならば、一つ一つの課題の消化は深い満足感を生み出し、新たな意欲をかき立ててくれることと思います。

ここでこれを読みなさいという一冊の本があれば申し分ないのですが、残念ながらそのような本の持ちあわせがありません。それぞれの本にその本としての良さがあり、この一冊というのを決めかねるからです。そこで簡単な英米文学史を読んで、その中から自分に合った最初の一冊を選んで下さい。そうすれば、この一冊の中からそれに続く読書の方が示され、あとはきっと時間との張りのある闘いになるでしょう。

文学部(仏)

文学部教授 末松 壽

「初心忘るな」と申しますが、後に忘れることになるかもしれない心を、もともと抱くことができなかつたらどうなるのでしょうか。僕等はもともと人生の初心なるものをもちません。逆説的ですが、これはむしろ僕等が生涯求め続けるべきものでしょう。

同じことが学問について言えるのかもしれませんが。外国語学習の初心とは、その困難、或いは不可能を徹底的に思い知ること、そしてそれでもなお知り尽そうと固く決意するという矛盾した覇気にありはしないかと僕は思うのです。ですからこの矛盾が大きければ大きいだけ、僕等もそれだけ絶望的な、しかしまたそれだけ激しい熱情をもって学習に向うことができます。

ここでまず紹介するのは、日本民族によるヨーロッパ文明や言語習得の初心にかかわる本二、三冊です。

1. 杉田玄白『蘭学事始』(岩波文庫5095)
2. 吉村昭『冬の鷹』(毎日新聞社、昭和49年)特にこの本の前半は面白いと思います。
3. 『どちりいな・きりしたん』(岩波日本思想大系25『きりしたん書』所収)

それから、二、三年次以後の学習のために買っていただいたらよいと思うのは、Le petit Robert という仏語辞典です。

一般教育

文学部助教 森 泰男

周知のように、英語のスクールは暇というギリシア語から来ている。諸君は高い金を払って暇を買って貰ったようなものである。諸君は今まで受験勉強に毎日あけられていた。大学に入って、解放の気分を味わっていることであろう。大学時代は大いに遊んでやろうと考えているのではないかと思う。

あるいは、もうこれで人生は決まったようなものだと考えて、今頃はあきらめに身をゆだねているのかも知れない。しかし人生というのは面白いもので、そう簡単には決まらない。もしあきらめが「明らかに見ること」であるならば、あきらめるとは目を閉じるのではなく、逆に目をしっかりと開いて現実を見、自己自身を見ることではなからうか。

このような人生の問題について考え悩むこと、自己と世界を明らかに見ようと努めること、これが学問をするということなのだ。遊ぶということもこのような学問において初めて生まれてくるのである。

さて、学問は問と問という二つの言葉からできている。学ぶとは「まねぶ」ということで、先生の言う通りにまねをし、習い覚えることである。一方、問うとは事柄の真実を究めようとする主体的な努力である。学ばないで真理を究めようとしても不可能であり、学ぶだけで問わないものは九官鳥と変わらない。そこで、真に考え問うことができるためにも、人生の師をみつめてほしい。幸いなことに、我々は書物を通して古今東西の師に出会うことができる。卒業してしまおうと、仕事以外の本が読めなくなる。在学中に本を読む訓練をしてほしい。読書を通じて、ものを考える力を身につけてほしい。

そのために、東西の古典を是非読んでほしい。西洋では、聖書とホメーロスが古典の双壁である。聖書についての解説書は沢山あるが、まず聖書そのものを読んでほしい。特に、旧約では創世記、出エジプト記、ヨブ記、新約ではマルコがおもしろいであろう。

次に参考までに、学問論、古典学、キリスト教学関係の本をあげておく。

- ・田中美知太郎、『学問論』（筑摩書房）
- ・ホメーロス、『イーリアス』（岩波文庫）
- ・田中美知太郎、『古典への案内』（岩波新書）
- ・山本七平、『対談・日本人と聖書』（TBSブリタニカ）
- ・猪城博之、『道の学び』（梓書院）
- ・ドストエフスキー、『罪と罰』（新潮社）

先輩から後輩へ送る図書館利用法

長崎外国語短期大学助手 石川 昭仁

図書館の利用法といっても様々あるが、ここでは、図書館を文献探索の目的で利用する場合を考える。参考図書を手を使って、資料を検索し、館内をコマネズミのように走り廻る無駄な労力と時間を節約しようという訳である。折角、図書館へ行っても、文献がみつからなかったと嘆く後輩諸君が多いから、参考図書の使い方の一例を挙げ、資料検索の方法を説明するのは、十分に意味のあることだと思う。

さて、仮に「エネルギー問題」の文献を集めたいとして、本学図書館所蔵の単行本は30万冊、定期刊行物は2,500種類もあるから、それらを一冊ずつ見て文献を探すのは、事実上不可能に近い。どうしても、合理的な文献探索には、文献目録や各種索引を利用せざるを得ないのである。

- (1) 単行本——「エネルギー」関係の本の検索は、件名目録カードでその項目を見れば簡単だが、本学に

はそのカードが準備されていないので、それにかわるものとして分類目録があるのでこれでその項目をみてゆく。あわせて次の参考図書を見るとその他にその関係の図書が出ているのがわかり参考になる。

- ・和書→「出版年鑑」「全日本出版総目録」など
- ・英米書→ Subject Guide to Books in Print 及び Cumulative Book Index.
- (2) 雑誌（一般・学術雑誌・大学刊行物等）
 - ・和雑誌→「雑誌記事索引」
 - ・英米雑誌→ Readers' Guide to Periodical Literature. (R. G.) Social Sciences Index 及び Humanities Index. (Hum. Ind.)
- (3) 新聞→「朝日新聞重要紙面でみる19××年」など。New York Times 紙は、New York Times Index を使って検索。
- (4) 政府刊行物→参考図書ではないが、「変化の中の資料問題」（経済企画庁）、「将来の資源問題」（科学技術庁）。米国議会出版物は、CIS (Congressional Information Service) (福岡アメリカンセンター所蔵) の Index で検索。

以上の参考図書の「エネルギー問題」の関連項目、すなわち「Energy」「Power Resources」などを見て、そこに記載されている論文名（書名）、著者名、雑誌名、出版年等を、逐次書き並べてゆけば、「エネルギー問題」に関する一応の参考文献が出来上がる訳だ。その中から西南学院大学図書館に所蔵されている文献（全体の3割以下だと思うが）のみ利用してもいいし、それで不十分であったり、重要な論文が本学にない場合、一般に「総目録」と呼ばれる参考図書を見て論文の所在を知り、その図書館の文献複写サービスを利用して、目当ての資料を手に入れることができる。同様に、日本になければ、外国の図書館から手に入る。

以上、「エネルギー問題」の文献資料検索にあたり、ごく基本的な参考図書のみ使用したが、より包括的な資料探索のためには、一層専門的な参考図書を併用しなければならない。英米文学に例をとるなら、R. G. や Hum. Ind. の他に、Abstracts of English Studies, および American Literature や PMLA の中文献目録を同時に活用することができるのである。

多くの人々の努力によって本学図書館のサービス機能は徐々に改善されつつあるし、図書館の中核とも言うべき「参考図書室」が充実されるのを期待している。

最後に、私はライブラリー・ワークが組み込まれた授業やライブラリー・リサーチの方法を体系的に学ぶ機会が西南にも設けられるよう希望する。私たちの知的好奇心とアカデミックなレベルの向上のために。

（筆者は、昭和53年3月大学院文学研究科英文学専攻修士課程修了）

<あとがき>

ご入学おめでとうございます。さて新入生の皆さんは、今後4年間本学において学問を究められるわけですが、期待と不安を担って授業に臨まれるにあたって、少しでも皆さんの指針となればという発意のもとに、各学部の図書館委員の先生方に、新入生のための読書案内、という題で執筆していただきました。

第4面においては、本年度本学を卒業されました石川さんに、図書館をいかに利用したら、今後4年間に知識欲を開拓できるかという発案のもとに、執筆していただきました。

今後の図書館の利用を期待します。 (I.A.)